アルペジリオ　- 優しい商人の話 -

椎乃みやこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アルペジリオ　―　優しい商人の話　―

【Ｎコード】
Ｎ５３８５Ｚ

【作者名】
椎乃みやこ

【あらすじ】
「アルペジリオ」
それは、ある世界の名前。
知らない世界の、知らないどこかで紡がれた物語。
様々な種族が暮らす世界の中で、彼女と彼たちには何が映ったのだろう。
誰もが魔法が使える世界で、少女だけ魔法が使えなかった。
血の繋がらない家族を持ち、ある秘密を抱えた少女。

いつの日か失ったものを、取り戻せるだろうか。
これは、ある「嘘つきな少女」の物語。

第1章　嘘つきな青色

もしもし神様聞こえますか？
私の住む世界はどこかおかしくて、とてもちぐはぐです。
たくさんの異質な人達が暮らしていて、穏やかだとは言い切れません。
おかげで何度も殺されかけました。
ただの何も出来ない人間だから、不思議な力も使えないけれど
それでも私は
ここで生きていることを、人間であることを、誇りに思っています。

「カナ、寝てるのか？」
少し低めの男の人の声。この声を聞いてシスイの声だとすぐにわかった。
「寝てる……」
ソファーの上で眠っていた私は不機嫌な声で答えた。うつ伏せになっていた体を、ごろりと回転させて仰向けになる。シスイが私の顔にランタンを当てて覗き込んできた。ランタンの光が眩しくて目を細めると、彼はやんわりと微笑んで、眠そうだなと感想を漏らした。
部屋の中は暗い。もともと私達が暮らしているところは、森の中なので電気など通っていないのだ。ソファーのすぐ側にある窓を見たら、さっきまで橙色だった空が黒色に塗り潰されていた。ぽっかりと浮かぶ月とたくさんの星が輝いている。今日も平和だなとぼんやり思った。
「寝るのなら、自分の部屋で寝ろ」
シスイは、ランタンを私の顔から遠ざけて苦笑した。世話がかかる奴と言わなくても、顔にかいてある。私は欠伸をして体を起こし、

ランタンの光で照らしだされたシスイの姿ざっと見た。ぼさぼさの金髪に、汚れた白衣。緑色の目が爛々と輝いているから、先生とおもしろい研究でもしているのだろう。

また私をおいてきぼりにして。

「しー兄(にい)こそ寝れば……」

「駄目だ。今いいところだから」

即答したシスイにうんざりした。

正直、私はつまらない。興味深い研究対象を見つけたら、二人だけで研究室に閉じこもってしまうからだ。本業は学者だから仕方ないと思うけど、こちらとしてはおもしろくない。朝から晩まで先生といろんな実験をして、会話もそればかりでもちろん私はその中に入れない。食事もろくに摂らないし、先生なんかそれすらも忘れて倒れてしまうことがある。

やめてなんて絶対言えないけど、限度ってものがあると思う。

「ふうん」

文句など一切ださずに、私は曖昧な相槌を打った。

「そんなに俺と先生が研究することに不満か？」

「……」

不意打ちだった。図星だ。

恥ずかしくなって押し黙ったら、軽く笑われてしまった。

この人はいつもそう。私が考えていることを簡単に当ててくる。血の繋がった兄妹でもないのに、人のことを妹扱いして保護者面をするのだ。私だって兄弟は欲しかったけど、どちらかと言うと兄じゃなくて弟の方が良かった。いやでも、この人が弟になっても気持ち悪いだけか。

「なんでわかるのよ……」

「なんでだろうなー」

シスイは適当にはぐらかすと、なれなれしく私の隣に座った。ソファーと向かい合わせのテーブルにランタンを置く。ポケットから煙草の箱を取り出したのを見て、私は睨んだ。

「またそんなの吸ってる」
「大丈夫、はまってなんかないさ」
しゅぼっと音がして周囲が一瞬明るくなった。
煙草独特の臭いが鼻につんとくる。
「すぐにやめてよ」
「うん、煙でもカナに影響するからな」
そういう意味じゃないのに。前々から思っていたけど、この人は自分のことより私や先生のことを優先する性格だと思う。
いわゆる『他人のために犠牲になるタイプ』。
「しー兄は、格好悪いよ」
私の発言にシスイは変な顔をした。
「そうか」
特に質問したりせず、煙草を口に銜える。煙草は大人になってから吸う物だと教わったから、未成年のシスイには似合わない。ちぐはぐで、なんだか変な感じがするのだ。
「最近、元気がないから、先生が心配していたぞ」
「……そう」
先生と言うのは、私を拾ってくれて育ててくれた生物学者のこと。
私は捨て子だった。昔の記憶はあまり覚えていない。思い出したくもない。自分の本当の親と思われる人達に手をひかれて深い森の中を歩かされて暗い森の中においていかれて暗い暗いあの森の闇の中に聞こえた音が恐くて金色の瞳が
「カナ」
呼ばれてどきりとした。首筋に冷や汗が流れている。
今は春なのになんだか肌寒い。
「カナじゃなくて、カナラ」
私は気を取りなおすと自分の名前を訂正した。先生からつけてもらった大切な名前なのだ。勝手に変えてもらわないで欲しい。
『カナラ』。それが、今の私だから。
「いいじゃないか別にー」

「シスイさんって呼ぶよ……」
ぼそりとやや声音を低くして言うと、シスイは物凄く悲しそうな顔をした。
「駄目だっ、絶対に駄目！　しー兄って呼んでくれっ」
「なんでそんなに必死なの……」
若干呆れながらも思わず笑ってしまった。小声でくすくす笑っていたら、シスイが頭に手を置いてきた。私が嫌な顔しているのを無視して、そのまま髪の毛ごとぐしゃぐしゃ撫でてくる。
「いい加減にしてよっ」
シスイの手を追い払うと、残念とにやにや笑った。叩かれた手をひらひらさせてくるあたり、妙に腹が立ってくる。私が睨むと溜息をつき、まだ充分に長さが残っている煙草をテーブルの灰皿に押しつけた。
「怒るなよ」
「またそうやってすぐ子供扱いする」
「子供じゃなくて、妹扱い」
「変態臭い」
シスイはそうかぁと不思議そうに首を傾げた。
「カナは家族だからそうなるだろ」
「誰も血なんか繋がってないのに？」
「もちろん」
森の中にぽつんとある一軒家。暮らしている人間は、誰一人血など繋がっていない。一人は三十路を過ぎた生物学者、一人はその愛弟子、一人は親に捨てられ拾われた娘。
それは、疑似家族。
私が、私なんかが、その家族の枠の中に入ってもいいのだろうか。
私が捨てられた本当の理由を、彼らは知っているのだろうか。
深い森の中、聞えるのは低い低い雑音と似ているあの音。
あそこで見たものを、彼らは見たのだろうか。
本当は、私はあの場所で

いかないであれがくるからいかないで

私は頭を軽く振った。

今のことは思い出しちゃいけない。何もなかったことにするんだ。

「俺は今、結構幸せなんだ」

シスイは時折、変なこと言い出す。私が訊く前に彼は言った。

「先生とカナがいるから、幸せだ」

自信たっぷりにそう答えられるあなたが、酷く羨ましい。

嘘つきな青色（2）

※　※　※

「カナラ、どうだった」

その部屋は、これでもかと言わんばかりにごたごたしていた。床には大量の紙や書物が散らばり、棚には乱雑に物が置かれていた。白骨化した何かの手が棚から下がっているかと思えば、瓶詰めにされた生物がじっと見ているような気がする。大した広さもないのに、よくこんなにも物が溢れるものだ。相変わらずこの部屋はとんでもないところだな。シスイは改めて実感しながら、足で適当に物をどかして部屋に入り込んでいった。

「駄目です、先生。相変わらず元気がありません」

先生と呼ばれた男は椅子に座っていた。分厚い本から顔を上げ、眼鏡の奥の目を細めて笑う。

「シスイはまたカナラに嫌われたようだ」

黒髪、黒目。風を守護とするこの国では、珍しい容姿である。髪を切るのが面倒なのか、伸ばしたまま後ろで一つに縛っていた。シスイと同じように白衣を着ているが、何日間も洗っていないらしい。シスイの白衣よりかなり汚れている。

「先生、痛いところ突かないで下さいよ」

シスイは苦笑した。梳いていない金髪頭をかきながら、カナラは反抗期なのかと尋ねる。

「それもあると思うよ。ちょうど思春期ってやつかな」

「思春期……」

初めて聞いた言葉のように口の中で数回繰り返したが、それでもシスイは納得しないらしい。険しい表情で考え、溜息をついたあと、頭を振った。

「でも、様子はおかしいです。自室に戻ったと思いますが、おそら

く、また」
「ラジオを聞いているんだね」
男はシスイと目を合わせると、同時に頷いた。
「電波なんて届かないはずなのに、カナラは何を聞いているかわかる？」
「ノイズ、じゃないですか」
「だろうね」
男は困ったなとシスイに聞こえないように呟いて、分厚い本をぱたんと閉じた。
男の後ろにある窓は開いていた。換気のために作られた小さな窓で、決して大きくはない。窓から入ってくる風はどこか冷たく、季節は春だというのに冬の気配が残っていた。空は晴れていて雲一つないが、その分、月が大きく輝いて気味が悪い。シスイは丸い月を一瞥し、視線を戻した。先生と慕う男は何も言わない。ただ愛弟子を見ているだけ。シスイは逡巡し、だいぶ間を持たせた。苦々しく吐きだした言葉は、低く、小さなものだった。
「……カナは、純血なんですか」
シスイの発言に男は返さず、代わりにこんなことを訊いてきた。
「カナラは、どうしてあんな所にいたんだろうね」
シスイは俯いて口を閉ざした。それでも男は問いかけを続ける。
「カナラは、どうして綺麗な服を着ていたんだろうね」
「……」
「まるで、お嫁にいくみたいだったよね」
「先生それは」
はっとしたように顔を上げたシスイに、男は優しく微笑んだ。
「うん、シスイもわかっているんだろう」
シスイが神妙な表情で頷く。
男は窓の外を眺めながら、今日は月が大きくて不気味だねぇとぼやくと
「生贄だろ、あの子」

静かな声で、はっきりと言った。
「カナを見つけたときから、わかっていたんですか」
疑問符がない、どこか確信めいた尋ね方。男は肩を竦めて吐息をつき、困った顔で笑う。
「ひと気のない森で真っ白なドレスを着て、手首と足首を縛られた女の子を見たら、まあ予想はついちゃうけどね。シスイはわからなかった？」
「いや、あの頃の俺は……。あまりカナのこと、好きじゃなかったので」
興味がなかったんです。もっと早く気づいてやるべきだったかなと、今頃後悔する自分が嫌でたまらないと愚痴をこぼす。男はそうかとなぜか嬉しそうに何度も頷いた。
「でも今じゃ立派な『お兄ちゃん』じゃないか」
「カナは認めてくれませんけどね」
「そんなもんでしょ、家族って」
「そんなもんですか」
シスイはどこか諦めたように笑うと、表情を引き締めた。先生と呼ぶ男の目を真正面からじっと見つめる。男もシスイから目を逸らさずに、穏やかな顔で見ていた。
「カナは、カナラは、正真正銘の純血の人間だから生贄にされたんですか。純血は珍しいから、気味悪がられたのでしょうか。それとも、もっと別の理由があるのでしょうか。夜中にラジオのノイズを聞くのは、それと関係あるんですか。先生、はぐらかすのはやめて、いい加減教えて下さい。カナは何も答えてはくれません。長い時間、一緒にいるのに、何も」
男は椅子にもたれかかり、だらしなく足を机の上に乗せた。その拍子に何枚かの紙が散らばったが、別段、気にした素振りを見せない。誰も何も言わず、気まずい沈黙が流れる。シスイは下唇を軽く噛み、男が口を開くのを待った。
やがて男はややあと声をあげ、淡々とした口調で話し始めた。

「僕はカナラじゃないから、あの子が何を思って、何を抱えて考えているか、全てわかることはできないよ。でも、考えることはできるからね。だから、時々、思うんだ。カナラを拾ってシスイとこうやって話をして、僕は楽しいよ。毎日が嬉しいよ。でも、カナラはどうなんだろうね。本当に、拾って良かったのかなって実は思ってる。あのままにした方が良かったんじゃないかって思ってる」

「それは、見殺しにした方が良かったってことですか」

男は躊躇いもせず、相変わらず穏やかな顔でうんと返事をした。

「ラジオのノイズ。きっとあの森の中で、似たような音を聞いたんだと思うよ。一種のトラウマだろうね。今でもそれをひきずっているのなら、助けてあげたいと思う。でも、僕が思うに、彼女は本当は———死にたかった、じゃないのかな」

シスイは黙って男の言葉に耳を傾ける。窓から入ってくる風が床に落ちた紙を拾い上げ、宙に舞い上げた。ふわりと浮かんで落ちていく紙がどこか幻想的にも見える。外の木々が木の葉を鳴らして、かさかさ音を立てた。今日は風が強い日だ。

「いったいどういうわけで、彼女のような純血の人間が生まれたのか知らない。今の人間は少なからず、何かの血が混ざっているからね。例え珍しい純血が生まれたとしても、その存在はほとんどと言っていいほど必要とされないんだ。他種族の力がない限り、僕たち人間は魔法が使えない。だから、彼女のような魔法が使えない子は、ようするに『いらない子』なんだよ」

『いらない子』。シスイは口を開きかけたが、男は手を前にだして遮った。

「カナラは、わかっていたんじゃないのかな。自分がそういう存在であることを認めて、受け入れていたと思うよ。僕はそう思いたくないけれど。あのとき、僕らが彼女を見つけたとき、あの子は泣かなかったね。下手したら生贄として、魔物か何かに食われるはめになっていたのに。助けても言わなかった。僕が抱えなかったら、あの場にずっといたと思うよ」

泣かなかったね。男はもう一度繰り返した。男は息を吐くと、沈黙を守るシスイに笑いかける。一言、ごくろうさまと。

「僕の『勝手にカナラの考えていることを想像しちゃえ講座』はここでおしまい。今後の課題としては、どうするべきかわかっているよね。さて、僕はまだやらなくちゃいけないことがあるから、いつも通り徹夜するけど。シスイはどうする。寝るかい？」

シスイは緑色の釣り目を細くして、首を振った。先生らしいなあと零して

「もちろん、つきあうつもりです」

心から嬉しそうに、朗らかに笑った。

※　※　※

嘘つきな青色（3）

ゆるして、ごめんなさい、だからいかないで、おねがい、こわいの、
あれがくるから、あれがくるの、
だってわたしにはきこえるから、おとがあのおとが
なんだかないているようにきこえるから、わたしまでかなしくなるわ
さみしいっていってるの、だから、こわいの、
だってわたしまでさみしくなるから
いままで、ずっとがまんしていたのに、はきだしてしまいそうでいやなの
だから、おねがい、いかないで

ザーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ラジオのノイズ音で目が覚めた。なんだかとても嫌な夢を見たような気がする。たぶん、昔の夢。私がまだ『私』じゃなかった頃の話。一番忘れたい記憶で、一番忘れられない記憶。

　私はベッドから起き上がるとラジオの電源を消した。ここのところ、なぜだかラジオを聞いていないと眠れない。森の中だから電波なんて届かないし、放送なんて全く聞こえないのに。いや違う、本当のところはラジオのノイズを聞いているのだ。あれを聞かないと、なんだかとても恐ろしい。

「朝ごはん作らなきゃ……」

　そうでもして無理やりあの男共に食べさせないとまた倒れてしまう。ベッドから下りて、カーテンを開けると朝日が目に染みた。今

日も快晴のようだ。昨夜は風の音が凄かったから、雲が飛ばされたのだろう。寝間着から普段着に着替え洗面所へと向かう。洗面所には先客がいた。

「しー兄」

「ん。カナ、おはよう」

シスイの目下に隈ができていた。どうやらまた徹夜をしたらしい。洗った顔をタオルで拭き、私に近づくといきなり髪をくしゃりと掴むように撫でてきた。露骨に嫌な顔をすれば、小さく声を上げて笑っている。

「先生からの注文、朝ごはんはコーンポタージュがいいって」

「先生がごはんのこと忘れてないなんて珍しいね」

ぺちり。勝手に頭を撫でているシスイの手を叩きながら言った。叩かれることに慣れているせいなのか、特に嫌な顔もせず、シスイはにこにこ笑っている。なんだかまるで、私と会話することを楽しんでいるみたいだ。

シスイの瞳は緑色。生物というのは、生まれた環境によって体質が変わってくると聞いたことがある。それならば、きっとシスイは先生と一緒にずっと森の中にいたから、目が緑色になったんじゃないかと勝手に思いついた。森の色、決して悪いものじゃないと思う。

「俺も好きだから、カナのコーンポタージュ」

「ふうん」

なんだかんだ言って、自分の料理に好意をもってくれるのは嬉しい。少し奮発して、多めに作ろうかと考えてみる。それと同時に、そろそろ買い出しに行かなきゃいけないことを思い出した。

「ごはんできたら、ドアの前に置いとくからね。あと、洗濯物はちゃんと出して。先生に体を洗わないと、臭いおじさんって軽蔑するよって伝えといて」

言ってから、我ながら主婦臭いと思った。いや、『家族』の役割で言うと『しっかり者の妹』と言ったところだろうか。そう考えるとなんだか妙な気分になった。私にこの役割はあまり向いていない

ような気がする。家事は嫌いじゃないけど、私は外でシスイと特訓する方が好きだ。
「しー兄、また特訓やってよ」
特訓と言うのは体術の訓練のことだ。シスイは学者の卵で身体がひょろっとしているくせに、なぜだか体術が非常に上手い。何度か取っ組み合いをしたことがあるけど、いつも負けてしまう。例え向こうがハンデをつけてもだ。
「あー、しばらくの間は無理」
「そう」
予想していた答えだけに素っ気なく返事をすると、シスイの手からタオルを奪い取った。
「洗濯にだすから使うよ」
「どうぞ」
朝ごはん待ってるからとシスイは言って、洗面所を出て行った。
私は顔を洗う。少し前まで川の水を汲んで使っていたけれど、今は地下水から汲み上げているらしい。蛇口を捻れば簡単に水が出る。今までと変わらず綺麗な水で害はないけれど、使うのにためらってしまうのだ。何度も外に行かずにすむようになったのに、この便利さになかなか慣れないでいた。
水で濡れた顔を上げ、目の前の鏡に映る自分を見る。青色の目に、背中まで伸びつつある銀の髪。私はあまりこの髪の色を気に入っていない。銀色なんて中途半端だ。先生のような黒髪が良かったなと思う。もう少ししたら髪を短くしよう。せめて肩ぐらいの長さまで切ろうかな。でもそんなことしたら、きっとシスイが口うるさく言うに違いない。
ふと、自分の青色の目が気になった。
もし、シスイの瞳が森の色なら、私は何の色なのだろうと。

嘘つきな青色（4）

「朝ごはんできたよ」
四角いお盆の上からコーンポタージュとこんがり焼けたトーストの匂いがする。豪華にしようと思っていた朝食は、あまりにも材料が少なすぎて断念。どうして今まで気づかなかったんだろうと返って不思議に思ってしまう。家事は私の担当の仕事だから、食べ物の管理ぐらいしっかりしていたつもりなのに。なんだか悔しい。もう一つ言うなら恥ずかしい。次からは気をつけなきゃ。
ドアを三回ノックすると気だるそうな男の声が聞こえた。これは先生の声だ。どうやら倒れずに無事に生存しているらしい。私は研究室に入ってはいけないことになっているので、ドアの前にお盆を置いた。ずっと前にその理由を尋ねると、教育上あまり良くないからと先生に苦笑されたこと覚えている。だったらシスイはどうなのだろうとつい文句を言ってしまいそうになったけれど、あの人は先生の『愛弟子』だから『娘』の私とはまた違うのだ。あまりそういうのは好きじゃない。だから私は、あの二人が研究に熱中し始めると、少しだけ不機嫌になってしまう。
こういう感情を『嫉妬』って言うんだろうな。
ドアの前にお盆を置き、買い物に行ってくると告げると、シスイの声が聞こえた。
「今日はヤシロさんが来ると思うから、あの人に街まで連れて行ってもらえ」
「……了解」
ヤシロと言うのは月に数回やってくる行商人のことだ。外に出ず、ひきこもり生活をしている先生はヤシロにとって格好の客だろう。彼は大陸で生まれた人間ではなく、先生と同じ東の国で生まれたらしい。ヤシロと言う名前をあちらの国の文字で書くと『夜白』と表記するとか。何か意味があるのかと訊いたら知らねと返されてしま

った。
　あの商人が売る物は値段が高い。近くにある街の店の方が安いので、私はできるだけそこで買うようにしている。暮らしている場所が場所だから、場合によっては仕方なくヤシロから買っているのだ。ヤシロと先生は旧知の間柄らしく、それなりに仲がいい。お得意様と言うこともあって、ヤシロが来たときに街まで送ってもらうことができる。
　ただし、物を買わなきゃいけないことが条件になっているのだが。
　ヤシロは月の中頃にやってくる。それも決まって、物に不自由しているところを狙ってだ。本人は商人の勘だと言っているが、私はあまり信用していない。
　それ以前に、私は
　馬の鳴き声と車輪が止まる音。商人がやって来た。ノックもせずに我が物顔でドアを開いて、私を見ると清々しいほどの商人スマイルで笑う。
「カナ嬢、みっけ」
「今すぐ引き返して下さい」
　私は、この男が大嫌いなのだ。
「それから、私の目の前から消えてもらえませんか」
「うわー、相変わらず嫌われているな。おれ」
　茶色の髪に茶色の瞳。人懐っこい瞳で私を見て、とっくに成人を迎えているくせに、子供っぽくけらけら笑う。私は商人を思い切り睨みつけた。どうしてか忘れてしまったけど、私はこの人のことが嫌いで苦手で、会話するのも嫌なくらい駄目なのだ。
「カナ嬢、あんまりそう嫌うなよ。商売やりにくいんだよな」
「気安くカナ嬢と呼ばないでください。それから、私の名前はカナ嬢じゃなくて、カナラです」
「可愛くねぇ、餓鬼」
　ぽつりと呟いた商人の言葉を私は見逃さない。黙ったまま睨んでいると、商人はわざとらしい素振りで両手を上げて「おぉ、怖い」

と言った。なんだかとてつもなく殺意がわいてくる。
「んじゃあ、いつものように商売始めるけど何が足りない？」
「欲しい物はありますが、街で買います。送ってください」
こんな人に頼むなど本意ではないが、仕方ない。家計のためだ。少しぐらい我慢しなくては。
「じゃあ、何か買っていけ」
「たまにはタダにしてくれたっていいじゃないですか。商人さん」
皮肉っぽく笑うと、商人はそれこそ子供のように不満そうな声を上げた。
「嫌だね、却下」
「ケチ」
「ケチで結構。おれは商人だから」
むしろそれでいいんだよ、どこか安堵した表情が、いつもの彼らしくなくて奇妙に感じた。

「何、これ」
商人愛用の幌馬車に乗り込み、たくさんの積み上げられた木箱を一つ一つ覗きながら品定めをする。木箱の中は様々だ。食品や衣類だけではなく、薬草や錠剤、本に宝石類まで。森暮らしの私は外の世界をあまり知らない。だからだろうか。ヤシロが仕入れてくる商品にはとても興味があった。実はお気に入りの小型ラジオも、この人から買った物だ。最初はカメラにしようかと悩んだけれど、声が聞けると聞いてラジオを購入することに決めたのだ。でも、森の中だから電波が届かないことを教えてくれなかった彼を、今でも恨んでいたりする。
適当な衣類と薬草を選んでいると、他の箱より一回り小さい物を見つけた。この箱は勝手に開けては悪いのかも知れない。ヤシロに断りを入れておくことにした。
「これ、開けていいですか？」

馬車の馬を撫でている彼に、箱を見せて尋ねた。
「ん、ちょっと待て」
ヤシロは馬から離れ、身軽に荷台に乗りこむと、箱を見てにやにや笑った。
「カナ嬢は御目が高いなぁ。いいぞ、開けて」
役者ぶった台詞に嫌悪感を抱きつつそっと箱を開ける。
「これって」
「最新の拳銃。自動式だ」
黒光りした重たそうな拳銃が箱の中に収まっていた。ヤシロを見上げると顎で触ってみろと促してくる。恐る恐る手に取れば、ずっしりとした感触があった。自動式拳銃はとても冷たくて、だからこれが人を殺す道具なのかと妙に納得した。拳銃自体、初めて見る物じゃない。シスイが護身用として携帯している小型の回転式を見たことがあるのだ。あれはこれと違って軽かったから、本当に人を殺せるのかと疑問に感じた。でもこれは、確かに殺害できる道具だ。
「なんだか、悲しくなってきた……」
重たい。でもこれが命の重みだと思うと軽く思えてくる。
この世界には生き物を傷つけるものが多いと思う。拳銃にしたって、私が使えない魔法にしたって、例えそれが道具ではなく言葉にしても、この世界はどこかおかしい気がする。
拳銃を握りしめたまま、自分の肩が震えているのがわかった。私は何かに怯えていることに気がついた。何かって何だろう。何に恐怖しているんだろう。
黒、黒色、真っ黒。何も見えない色。
それは暗闇。
「肩、震えているぞ」
ヤシロに手を置かれて、思わず肩が跳ねた。私は自分の肩が跳ねたことに驚いた。だけど、ヤシロは私よりも驚いていた。茶色の目を大きく見開いて、ぽかんとしている。やや首を傾げて心配そうに私の顔を覗き込んだ。

「カナラ、大丈夫か？」
その行為に思わずどぎまぎしてしまった。
慌ててヤシロから少し距離をおいて頷く。
実際は大丈夫なんかじゃない。未だに拳銃を握っている手はかたかた震えているし、背中に冷や汗をかいているのがわかった。拳銃を放せば体の震えは治まるのではないのかと思う。けど、なぜか手が開かなかった。強く黒い鉄の塊を握りしめたまま放してくれない。
私は手の中にある物に、もう一度目を向ける。
ゆっくりと視線を滑らせて、拳銃の先、銃口で目が止まった。

あぁ、私は、

「お前に拳銃は似合わないな」
はっとした時には、私の手の中にあの黒い塊はなかった。隣でヤシロが拳銃を片付けている。ぽかんとしたまま突っ立っていると、ヤシロは私を見ずに先程の言葉をもう一度繰り返した。
「お前に、それは似合わない。シスイにでも売っておくさ」
私は何も言わず、その言葉をただ黙って聞いていた。

嘘つきな青色（5）

森を抜けたら街道にでる。街道を一直線に走っていくと街に入る。街の入り口付近には大勢の商人が露店を開き、賑わっていた。滅多に人が来ない森の中に住んでいる私にとって、人がたくさんいる所は少しばかり緊張してしまう。がたがた揺れる幌馬車の荷台から街の様子を窺うと、多くの種族が行き交っていた。

例えば、誇り高い獣の血を受け継ぐ獣人、絶滅した巨人族の子孫にあたる超人、神の使いと崇められた聖族。それから、人間。今ではもう、純粋の血が通っている人間はほとんどいない。

「へえ、魔族がいるぞ」

手綱を握りしめながら、ヤシロはやや興奮を押さえた声で言った。ヤシロの左手の甲が反射して、ぎらりと光る。鉛色のそれ。彼の手の甲をべったりと覆う鉛色は、皮膚そのものだ。ヤシロだって純血の人間じゃない。超人の血が混じった人間だ。この人の皮膚は、鉛と似ている成分でできていると先生が言っていた。異種の血が混じった人間。それがこの世界の『普通』。

「魔族？」

幌馬車の幌をめくって外の様子を見てみるけれど、誰がその人なのかわからない。馬車は移動しているのだ。もしかしたら、通りすぎたのかも知れない。

「わからないや……」

半ば諦めて顔を引っ込めようと思ったとき、ヤシロが声を張り上げて後ろと指示をだした。

慌てて幌から顔をだして覗くと、流れ行く人の中で赤い髪の女の人を見つけた。遠目で見てもその人の姿だけ、はっきりと目に映る。なぜ今まで気づかなかったのかと不思議に思うくらいに、とても目立っていた。赤いのは髪だけじゃない、瞳の色も真っ赤だ。

あれは、血の色。

「魔族は夜行性って聞いたんだけどな。昼でも活動する奴はいるのか」
「綺麗な人……」
「魔族と聖族はべっぴんが多いからな。骨抜きにされるなよ」
おちょくるように言ってきたヤシロを見て、私はにやにや笑いを返してやった。
「鼻の下を伸ばして見ていた癖に、よくそんなことが言えますね」
ヤシロがぎょっとした。図星なのかどうかわからないけど、顔が真っ赤になっている。
「……お前っ、大人をからかうな！」
「ヤシロさん顔赤ーい」
「笑うんじゃねえ！」
慌てて弁明しようとするヤシロがおもしろくて、ついつい私は大声で笑ってしまった。
そういえば、大声をだして笑ったのは結構久しぶりかも知れない。
最後に笑ったのって、いつだっけ。いつだろう。
今度は人を見るためではなく、空を見るために顔をだす。空はとても綺麗な水色をしていた。風にゆっくりと流されて行く雲を見ながら私は考えてみる。思い出してみる。
でも、なぜか思い出せなかった。

私はヤシロから商品を買わない代わりに、店番を手伝うと申し出た。断れると予想していただけに、あっさりと承諾されてしまったものだから心底驚いた。何か裏があるんじゃないかと思いつつ、街まで連れてってもらえたのはいいんだけど。
「お客、来ない……」
幌は全て取り払われており、今は商品が見やすいように木箱の蓋は開けられて並べてある。荷台に座ってぶらぶら足を揺らしながら、私は昼食のサンドイッチを口に入れた。
「つまんない」

ヤシロは行くところがあるからと言って、どこかに行ってしまった。一人、行き交う人々を眺めながら溜息をつく。だいたい、何も言わないヤシロが悪いのだ。店番なんて初めてなのだから、少しぐらい客が寄ってくる方法とか教えてくれればいいのに。

「ヤシロのいじわる」

彼を呼び捨てにして悪態をついた。その後、彼が呆れた顔でやってくることに期待しながら周りを見渡してみるけど、それらしい姿は見かけない。私は舌打ちをするとごろんと仰向けになった。見上げた先に空なんかない。あるのは、幌馬車の天井となる梁。

「ばーか、ばーか。ヤシロの馬鹿」

我ながらガキ臭いと思いつつ、歌うようにその台詞を吐いてみる。言った後、妙におもしろくなってきてヤシロの歌でも作ってやろうと思いついた。何かの替え歌にしようか。そして、帰ってきたヤシロを困らせてやるんだから。そう考えるとなんだか楽しくなってきた。

残りのサンドイッチを頬張って、私は起き上がった。

起き上がったら、目の前に赤い髪と瞳を持った女の人が立っていた。

「……」

いつのまに荷台に乗ってきたのだろう。どうすればいいのか対応に困ってそのまま固まっていると、彼女はくすくすと笑いだした。ふっくらとした桃色の唇、整っている綺麗な睫に、ふわりとした柔らかそうな真っ赤な髪。そして、夕日よりも濃い、血液と同じ色をした瞳。

妖艶。その言葉が彼女にとても合っていた。

「こんにちは、小さな商人さん」

透き通るような声を聞いて、思わず姿勢を正した。この人、ヤシロが言っていた魔族だ。遠目でから見てもそうだったように、綺麗な人である。同性の私でさえ見惚れてしまうくらいに。

「えっと、な、何をお求めですかっ」

声が裏返っている自分に嫌悪をしつつ、すぐさま立ち上がって尋ねた。彼女を直視できず、どうしても顔から目を逸らしてしまう。初めてのお客さんだから逃しちゃいけないのに。何やっているのよ、私。

「そうねぇ、一つ訊いてもいいかしら」

「え、はい。どうぞ」

「あなたは、売り物なの？」

今、この人、とんでもないことを言った気がする。

私は逸らしていた目を彼女に向けた。

彼女は顔色を変えず、同じ笑顔を保ったまま私を見ていた。

その微笑に悪寒を感じてしまった。

「冗談を言わないでください。私はただの売り子ですよ」

「へえ、そうなの？」

彼女は一歩近づき手を伸ばしてくる。鋭く長い爪を見て、私は身を引いた。

「そんなに怖がらなくてもいいじゃない。別に取って食おうと思っているわけじゃないのよ」

「ごめんなさい、悪いですがそうとしか思えません」

後ろのベルトに取りつけてあるナイフの柄をそっと握る。ナイフの使い方はシスイに教わった。もし、食われそうになったら、容赦なく相手を切りつければいい。

私は、静かに息を吐く。瞼を閉じたのは、ほんの刹那。

大丈夫。感情を押さえつけることは慣れている。

昔、やっていたことと同じことをすればいい。

彼女から一歩引き、相手の出方を見る。睨みつけると、彼女は優しく笑ってこう言った。

「あたし、あなたのこと好きだけど嫌いだわ」

笑顔と釣り合わない矛盾している言葉。

笑っているのに優しく微笑んでいるのに、なぜか安心できない。

「どういう意味ですか……」

「どういう意味って、そういう意味」
「あなたに、好かれようと嫌われようと関係ありません」
「それ嘘よ。今、あなたは嘘をついたわぁ」
私は顔を顰めた。似たような言葉を、前にも聞いたことがあるような気がする。
誰だっけ。誰が、言っていたんだっけ。
「いつもそうやって嘘をついているのね、嘘つきな商人さん」

――――「いつまで自分に嘘ついているんだ。この嘘つきめ」

思い出した。忘れていた。私、だからあいつのこと嫌いだったんだ。
本当のこと、言われたから。先生にもシスイにも隠していたのに、簡単に見破ってきたから。
あんなやつなんかだいきらい。あんたなんかだいきらい。
「何の話ですか」
彼女はまぁとわざとらしい声を上げ、頬を両手で包みこむようにして再び笑った。
「まぁた、そうやって誤魔かす。そんなことをしているから、『本当』を忘れてしまうのよ。とっても久しぶりに人間臭い匂いがしたから、どんなのかなって思って来てみたのに。全然、全く、面白くない。歪んで崩れて捻くれて。綺麗じゃないわ。美しくないわ。かわいそうな子」
どこか歌うように、彼女はそんなことを言い始めた。彼女が動くたび、群青色のワンピースがひらひら揺れる。スリットから艶かしい太股がちらちら見えて、なんだか見ちゃいけない気がした私は慌てて目を逸らした。
「私の何がわかるって言うんですか」
低い声でぼそりと言い返す。
初対面の人に、そんなことを言われる筋合いは全くない。

「ねぇ、もしかして、貴女は純血？　それって、とーっても危ないことじゃなぁい？」
私は何も言わなかった。彼女を睨みつけるだけで精一杯だった。
純血の人間だから何。何が言いたいの。軽蔑されて、下手に同情されて、かわいそうと言われたことは何度もあった。かわいそうなんて言葉だけ。結局、最後はいらないもの扱いされて捨てられた。私の手を引いたあの人たちから、温もりなんかこれっぽっちもなかった。
うそつきなのはあっちの方だ。
「本当はわかっている癖に、だんまりをするのね。でも、否定をしないってことは、やっぱりあなたは純血ってことかしら。あのね、かわいそうな子。せっかくだから教えてあげるわ。珍しいものは、高値で売れるってこと、知っている？」
「それが、何」
「だからあたしは売り物かって訊いたの。貴女、連れがいたでしょ。馬車から一緒に見ていたのを知っているわ。その人が貴女を売るのかと、てっきりそう思っていたんだけど」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5385z/

アルペジリオ　- 優しい商人の話 -

2011年12月18日03時06分発行